汽　車　通　学　の　残　映 (※1)

高普第６回卒　　奥 村　晃 三 (※2)

「”ポッポー”と遠く汽笛が聞こえて来る。汽車が眞野川の鉄橋を渡り、鹿島駅に近づいて来た合図だ。急がねば乗り遅れる！高下駄をカタコト鳴らしながら風呂敷包みの教科書を抱えて砂利道を走る。大小の石が高下駄の歯に挟まらないかと気になるが、唯ひたすら走る他はない。どうしても間に合いそうもない時は、列車の進行方向の線路に飛び出し機関車目がけて走る。機関士が窓から首を出し、手招きしながら、“急げ”の合図、東北人の情の深さ？を感じる一瞬だ。」

当時（昭和 26 年～29 年）の鹿島から相馬高校への通学は、常磐線の汽車通学が唯一の交通手段であった。しかも、始業時間に間に合うダイヤは選択の余地はなく唯一本、早い時間でも乗る他はない。授業終了後に帰宅するのも同様で、汽車通学の学生にとっては、汽車の時刻表が毎日のスケジュールに優先する。したがって、同じ方面から通学する学生は同じ汽車に乗り、しかも２～４輌の連結しかないので、大体同じ車輌になる。それでも男子高校生と女子高校生は、残念ながら？別々の車輌に乗るのが常であった。20 分前後の所要時間は途中半端で、読書派は少なく雑学を口角泡を飛ばして論じ合うか、車窓に展開する緑の絨毯や山林の木立に心奪われるかの毎日であった。

一方、この汽車通学によって生まれた授業外の時間的余裕は、高校生活の中で大きな意味をもっていた。それはクラブ活動への積極的参加であり、スポーツ関連クラブはもとより、学芸クラブにも参加し交友関係の環が広がっていった。又正式にクラブに入部しなくても、有志による時間調整の為のスポーツはきわめて盛んでバレーボール、サッカー、テニス等が人気で、チームに別かれ、かなり眞剣に対抗戦を楽しんだものだ。まさに高校生活の凝縮された時間であり、友情を育む貴重な時間にもなった。

３年程前に、母校の「先輩と語る会」で後輩にお話をする機会を得たが、新しい校舎の中を案内して頂き、当時とのあまりの差に驚愕するとともに、男女生徒のバランスが一変しているのに時の流れを痛感した。今だから云えるが割れたガラスから教室に吹き込む寒風に我慢出来ず、ごめんなさい！と云いながら破れた羽目板をはがしてストーブの薪に･･･。そんな時代も 110 年の歴史の一頁だったかもしれない。

経済同友会の活動の一つとして「学校と企業経営者の交流推進活動」に参加し、多くの学校を巡回して子供達や先生方と接触する機会を得たが、当時の高校生活に比べて同級生間の交流が少なく、絆も弱い。特に子供達と社会との断層があまりに大きい。多くの心許し合える友を求め、より多くの社会の理解者を求めている子供達に我々は何をしてあげているか。我々ＯＢももっと後輩達に関心を持ち、悩める若者達を支援する場を提案することが必要ではないだろうか。又躊躇いがち？に子供達の指導に当たっている先生をバックアップすることも重要であろう。

地域の活性化は、地域の教育活性化が基盤にならなければならないと思うのは小生だけだろうか･････。

(※１）創立 110 周年記念誌『紅の旗』〈2009（平成 21）年１月発行〉「思い出の記」〈ああ、我らが青春の日々よ〉より。

(※２）昭和 29（1954）年卒、鹿島出身。第 11 代馬城会長。　　（ 転記&※脚注　村山 ）

創 立 百 二 十 周 年 を 迎 え て(※1)

創立百二十周年記念事業実行委員長
奥 村　晃 三(※2)

本日は福島県立相馬高等学校創立百二十周年記念式典に当たり、内外よりご来賓多数のご臨席を賜わり、かくも盛大な式典を挙行出来ますことは、この上ない喜びであります。

また、記念事業実行に当たり、馬城会は、ＰＴＡ、若駒会及び学校関係職員の方々並びに相馬市の皆様の絶大なるご協力を賜わりましたことに対し、衷心より感謝申し上げる次第でございます。

本校は明治 31 年に福島県第四尋常中学校としてスタートし、以来多くの諸先輩のご協力により本年ここに創立百二十周年を迎えました。

特にこの十年間は決して忘れることのできない平成 23 年の東日本大震災に見舞われ、福島県浜通りエリアは地震・津波・原発と風評被害の四重苦を体験することになりました。私達はこの十年を振り返る時、この経験から得られた教訓を決して無駄にしてはならないと考えます。この災害は、故郷に対する限りない思いと、強い団結の絆を与えてくれました。

相馬高校は母校の災害復旧に努めながら、サテライト協力校として、総勢五百余名の他校生徒を受け入れ、協力することも出来ました。

私達は創立百二十周年の記念行事のテーマとして何をとりあげるべきかを考えた時、大震災が相馬高校に与えた影響と災害時における対応を記録し、それを主題として後世に伝えることが我々の責務と考えました。

在校生の皆さんは命の大切さと、ふるさとへの思いを再確認し、校訓の「至誠」が意味する「心」を大切にしてほしいと思います。

そして我が校歌に歌われている「理想の峯」と「学びの海」へ挑戦を続けて下さい。

結びに鑑み、今日まで相馬高校の歴史と伝統を支えて頂きました皆々様の温かいご支援に厚く御礼申し上げますと共に、今後とも更なるご尽力とご協力をお願い申し上げ、ご挨拶とさせて頂きます。

(※1）創立百二十周年記念誌『乗り越えて その先へ』〈2018（平成30）年10月20日発行〉「ごあいさつ」。

(※2）高普第6回、昭和29（1954）年卒、鹿島出身。第11代馬城会長。

（ 転記&※脚注　村山 ）